松崎慊堂由緒書

全

H20
3975

H20
3975
東京帝國大學圖書印
B 23475

松崎慊堂由緒書

松崎慊堂由緒書

慊堂は此村（山益城郡木倉村）の生れにて、農夫源藏と申したる者の孫なり。父は恵芳とて何方の産とも知らず。行脚體の僧にて、矢部方へ薬など賣りて、歩行仕来のおりおり、源藏方へ止宿致しけり。源藏は娘二人ありて名をげんと云ひしに、聟養子して置きしに、是れも女子獨りありて、名をたつと呼ぶ。寵愛しけるに、二三歳に相成候比、聟は離縁して、在所の様引取、其後源藏親子小児のたつを育て居ける内、源藏は極老にて相果て、孫のたつ十歳許りにも相成り、在家へ子護り奉公に遣し、げん一人暮し居候ひしに、恵芳おりおり止宿の内、何つとなく夫婦となり、恵芳灸點など卸し、針など打ちける故、近所のもの心易く出入致し、真實の夫婦の様に居續に住し

ける内、男子を儲け、名を松次郎と付けて、生得柔弱に見えけ
れども、相應に成長し、八歳の時より、某が父政成の教授にて
手習をなさせ、某には三つ程後れける。隣家の事故、腹よりの
弟の様に思ひ、なにはづの文字も手を取りて教へ、愛して遊
びしに、十一歳に成候時より、真宗寺の小僧に遣し、聞く慊堂生れて四
五歳になりければ、其性質柔弱の様に見ゆれども、心氣英邁、甚
戯れに為す所、徒々人意の表に出づ。他児と決して群を同じ
うせざるを見る。八歳の頃、横田政成の門に入り字を学ぶ。政
成の手本を見て嘲り笑て曰、是何で手本とするに足らんやと、其所作不遜の事共多し。政成甚だ呵責せず、循々誘導す。
然れども父母其不遜を愛し、戚み行末如何ならんと案じ、強て
真宗寺の坊主に頼み寺の小僧に遣はせしといふ 其名を教應と呼しなり。然れ
ども寸度有付悪く、讀書は好き上は見え候へ共、折々御國の
内、方々流浪致し、十三四の時、不圖御國出奔致し、又聞く慊堂大に學に志
し、京師に遊び良師に従はんと欲すれども、如何せん小僧の身
にて、一錢の貯へもなく、いかゞせんと思ひを焦らす中、一策を

案じ出し、自ら御船町威徳寺新發智と偽り稱し、其門徒中
山砥用邊を郷廻し、說法講談して、上京の學資を募る。數
日にして若干金を得たり。依て門徒等に謂て曰く、我明日
發足せんと欲す。汝等威徳寺に至り幸に我を送れと。門徒
の人相集りて馬に乗せ、既に御船町威徳寺の近所に至り、
慊堂馬より下り、予朋友に別れを告げんと欲す、汝等威德
寺に至り休足すべしと。於是、門徒等威徳寺に至りて、新發
智の上京を賀す。其住職呆れて、當寺の新發急は已に先年
上京し、今に歸らず。其何人の所為ならんと云ひければ、衆
始めて詐かるゝを知り、其儘家に歸り、誰の所為ならんと
吟味探索しけるに、其後慊堂の行方知れざるを以て、其慊堂なることを知りしと云ふ 歸らざる
故、遠近尋ね候へども行方知れず。父母共に殊の外愁嘆し、
數年案勞の内、追々父母も空しく成りける。斯て十箇年餘
も過候て、熊本儒官大城多十郎と申す人、江戸在勤の砌、至
て懇に對話致し候由にて、其父子名當の紙面傳候也、歸國
の上申届候處、教應事松崎退藏と名儀有之、乍不審及

松本紙舗

披見候處、諸國流浪の内、坊主を相止め、右の名に改め、方々にて經學出精致し、江戸へ罷出、御儒官林家へ入門致し、彌増勤精の中、遠州掛川御領主太田攝津守へ被召抱候段申越候故、年來の始中終相分候也。早速大城氏へ出て委細承り候處、其比より拔群學功有之たる儀相分り、其後便宜毎々書翰取遣致す内、退藏舊里の事、姉たつへ智養子参り、女子一人男二人出生、何れも健に成長は致し乍へども、零落の次第等詳しく書加へ、少しく助力有之度、左候はゞ、拙者世話致し、百姓に仕付度と申遣し候へば、退藏も殊の外感淚に銘し、其後程有て小判拾兩、江戸勤仕の人へ頼み下し候ゆゑ、夫を以て役方の面々へ頼み、地方等手に入れ、兎や角

松本紙舗

農夫に有付候なり。其次第委しく申遣し、退藏も甚及安悦。書狀取遣しは不斷致し、此已前朝鮮人對州へ到着の砌、從關東御用命に就、林候御下國の御供にて、退藏も被召連彼地御用向相濟、暫く御暇を願、此地へ立寄、某が宅を舊里の樣にて召供し候家來三輩共に、八日程滯留致しける。其比父政成は大病の床に臥しけるを、退藏は幼年の世話に成ける恩顧を謝し、厚く介抱など致し、盡せぬ名殘を惜み、落淚せきあへずして、復又江戸の樣に赴きける。其後尚不斷、書翰取遣の内、退藏は不運にて長男彌六と云しが、四十一歳にて身まかりける故、幼年の孫を養育致し、其比より慊堂と改名致しけるに、去る天保十四年四月、年來勤學の

功上聞に達し、奉蒙嚴命、公方樣御目見被仰付、式節の御禮にも出仕しける由申越、寔に冥加至極の仕合、恐怖とも難有とも言語に盡し難き次第にて、其高名普く本朝に弘みけるは、諸人の知る所なり。猶また追々當國太守樣御目見も奉蒙御命令、御小袖銀杯被為拜領、無比類冥加の仕合ども、禿筆に難顯事どもなり。然れども限りあるは人定の齢なり、天なる哉命なる哉、去る辰の夏四月、七十三歳、何病ともなく、只老木の朽るが如くして、二十一日黄泉に趣きしは、誰も惜まざる者こそ無かりける。況んや此村里に於てをや。知るも知らざるも、貴賤となく感惜せざる人ぞなき。此已前六十路餘りの比、自己の面を畫にして

松本彫鋪

下し置けるを、彼が甥ども表具致し、掛まくも畏く遠忌の追善を弔らひまつらん事を願て、熊本儒官井上何某と申す人に願ひて、贊筆を乞求めける。予にも慊堂生涯の由緣を、委く書添つらん樣を願ひければ、某は生得愚昧にて、和漢の學に疎き故、深く斷りければども、强て頼みける故辭するに堪へずさしども雅に書調へんことも輙からねば其あらましをたど〱しき筆の儘に云爾而已

玉鉾の學の道の世に高き類ひ稀なる名のみ残れり

木倉村祠官　横田常陸誌

右日本書畫人名辭書續編附卷名家書
畫談一巻中所載云書畫談大正四年三月
東京神田錦町松山堂所刻也　桂川中學
教諭野崎安太郎抄出貽予
大正八年三月三日　源湛

松本紙舗